



胆石があるといわれたら

はじめに

最近では健康診断や人間ドックの際に、胆石が無症状で発見されることが増えています。体への負担が少ない超音波検査やMRCP(磁気共鳴胆管膵管造影)などの画像検査技術が進歩し、かなり小さい胆石であっても早期のうちにつかる人が増加しています。今回は、この胆石がどんな病気なのかについてお話しします。

胆嚢にできる石、『胆石』

我々の体の中では、食べたものを消化するために様々な消化液が作られています。肝臓では脂肪やたんぱく質などの消化を促す「胆汁」が作られ、いったん「胆嚢」という袋に蓄えられて濃縮されます。この「胆嚢」の中にできる石を『胆石』と呼びます。

胆石は胆汁成分の偏りや細菌感染が原因といわれており、体質や食生活が大きくかかわっています。成人の約8%が胆石を持っており、中年以降、特に女性に多いとされます。最近では食生活が欧米化し脂肪の摂取量が増え、胆石の方が増えてきています。肥満や過食、不規則な食生活、ストレスなどの生活習慣も影響していると考えられます。

症状、検査

胆石を持っていても半数以上は実際には症状が出ることはありません。典型的な症状としては、胆石発作と呼ばれる食後の激しい腹痛、吐き気・嘔吐、発熱などがあります。特に発熱を伴う場合は胆嚢炎が起きている可能性があります。胆嚢炎とは胆嚢に細菌が感染して炎症により痛みや発熱を引き起こしている状態で、基本的には無治療では改善せず、入院および抗生剤による治療を必要とします。

胆石症または胆嚢炎の診断のためには、腹部超音波検査、腹部CT検査、MRCP検査、血液検査が行われ、胆石の有無や胆嚢の大きさ、炎症所見などが評価されます。

治療

症状のない胆石は、生活改善を行いながら経過観察を続けられることが多いです。腹痛などの症状が出る場合には、まず鎮痛剤、抗生剤を用いて治療をします。

その他の内科的治療としては、飲み薬で胆石を溶かす胆石溶解療法や体外式衝撃波破碎療法などがあります。内科的治療が適応とならない場合や、内科的治療でも改善しない場合、今後も繰り返すことが予想される場合などでは手術が勧められることがあります。

手術(腹腔鏡下胆嚢摘出術)について

手術は、一般的には腹腔鏡で行います。具体的には、おなかに小さい穴を4カ所あけてカメラおよび手術器具を挿入し、胆嚢を切除します。おなかを大きく開ける開腹手術でも胆嚢を切除することはできますが、腹腔鏡手術の方がおなかの創が小さいため痛みが少なく、体の負担も軽くなり入院期間も短くなることが多いです。おなかの中が強く癒着していたり、胆嚢炎がとともひどくて腹腔鏡では手術ができない場合には、途中で開腹に移行したり、最初から開腹で手術することもあります。腹腔鏡で手術をした場合、多くは術後3日程度で退院できます。当院では毎年、胆石に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術を70~80件程度施行しています。

おわりに

胆石があるといわれたら、症状がない場合でも半年~1年に1回は定期健診を受けられることをお勧めします。また食後の腹痛が気になる方は、胆石が原因であれば治せる可能性がありますので、一度病院でご相談されることをお勧めします。

